令和５年　３月　３日

福岡県教育委員会教育長　殿

所属校名　　福津市立福間小学校
職・氏名　　教諭　　浅井　優平
指導教諭　　教諭　　井手　　司

研　修　最　終　報　告　書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

１　研修種別　　Ｃ　　福岡教育大学附属福岡小学校研修員

２　研修場所及び所在地　　福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061　福岡市中央区西公園 12 番１号
ＴＥＬ　　（０９２）７４１－４７３１
ＦＡＸ　　（０９２）７４１－４７４４

３　研究主題及び副題

社会参画を志向する子供を育む社会科学習
～「見いだす活動」を各段階に位置付けた単元構成を通して～

４　研究主題及び副題についての説明

(1)　主題の意味

社会参画を志向するとは、第４学年の子供が自分の住んでいる地域の課題を見付け、地域の課題の解決に向けて、見学や調査を行い、人々の役割や取組の価値を捉えることを通して、自分にできることを意思決定することである。なお、第３学年では、自分の住んでいるまちや市を対象に、自分の考えをもつ「社会参画を思考する」レベル、第５・６学年では、多角的に考え、参加・提案していく「社会参画に向けて試行する」レベル、さらに中学校以上では、社会参画に実行に移していく「社会参画に向けて施行する」レベルへと社会参画の意識レベルが高まっていくと考える(図１)。

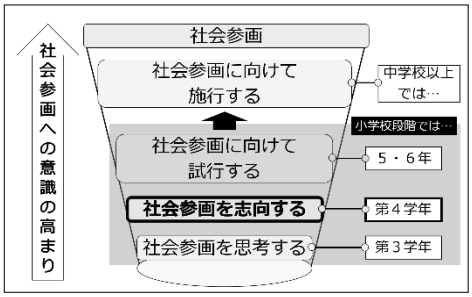


図１　社会参画への意識の高まり

社会参画を志向する子供とは、地域の課題の解決に向けて、自分にできることを意思決定していく中で、特に思考力、判断力、表現力等に関わる資質・能力を発揮する子供である。具体的には、以下に示す３つである。

○　考えるべき地域の課題を見付けることができる子供	(発見力)
○　人々の役割や取組の価値を考えることができる子供	(考察力)
○　生活や地域の様子と関連付けて、自分にできることを決めることができる子供	(決断力)

社会参画を志向する子供を育む社会科学習とは、第４学年における社会科の学習において、考えるべき地域の課題を見付け、地域の課題の解決に向けて取り組んでいる人々の役割や取組の価値について捉え、自分の生活や地域の様子と関連付けて自分にできることを意思決定していく学習のことである。なお、資質・能力は主に、導入段階では発見力、展開段階では考察力、終末段階では決断力と各段階で発揮していくと考える(図２)。

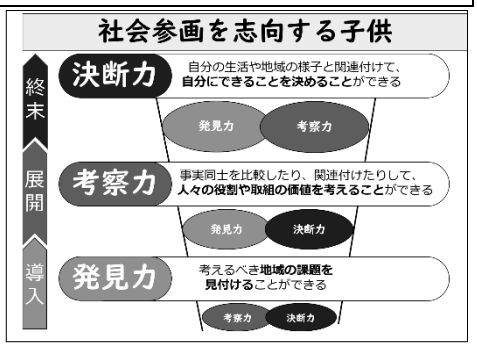


図２　目指す子供の姿について

(2) 副題の意味

「見いだす活動」を各段階に位置付けたとは、小単元の導入段階に「見いだす活動Ⅰ」を、展開段階に「見いだす活動Ⅱ」を、終末段階に「見いだす活動Ⅲ」を位置付けることである。

導入段階における「見いだす活動」(見いだす活動Ⅰ)とは、考えるべき地域の課題について話し合う活動のことである。考えるべき地域の課題を捉えるためには、現状に関わる資料と将来に関わる資料から、疑問を出し合う必要がある。そして、「このままでよいのか？」「自分にできることは？」といった疑問を基に、地域の課題に関わる学習問題を設定できるようにする。

展開段階における「見いだす活動」(見いだす活動Ⅱ)とは、地域の課題の解決に向けて取り組んでいる人々の役割や取組の価値について話し合う活動のことである。役割や取組の価値について考えるためには、追究してきた事実と工夫や努力に関わる事実を関連付けていく必要がある。関連付けることで、「○○(さん)は、～するために」と役割や取組の価値について考えることができるようにする。

終末段階における「見いだす活動」(見いだす活動Ⅲ)とは、地域の課題の解決に向けて、自分にできることを意思決定する活動のことである。自分にできることを意思決定していくためには、自分の生活や地域の様子を基に考えていく必要がある。そこで、自分の生活や地域の様子と地域の課題を関連付けて、「だから、～をしていきたい」と決めることができるようにする。

(3) 仮説実証のための着眼

ア　取り上げる地域の課題の条件

本研究で取り上げる地域の課題の条件は、以下の３つである。

必然性	子供たちに関わりがあり、地域の課題が見えるもの
持続可能性	これからの地域の存続や発展に影響があるようなもの
多様性	友達やGTと様々な考えのやり取りができるもの

イ　「見いだす活動」を活発にしていく手立て

「見いだす活動」を活発にしていくために、小単元の導入、展開、終末の各段階において、資料(内容)の提示、思考ツールの活用、GTの活用を位置付けていく(表)。

(ｱ) 資料提示の工夫

導入段階においては、現状や将来に関する資料を、展開段階においては、目には見えなかった工夫や努力が分かる資料を提示する。終末段階においては、与える影響や困っていることなどをGTの話や資料によって提示してもらい、考える視点を明らかにすることができるようにする。

表　各段階のねらいと手立ての位置付け

ねらい／手立て	見いだす活動Ⅰ 自分が考えるべき地域の課題を見付ける	見いだす活動Ⅱ 地域の課題の解決に向けて取り組んでいる人々の役割や取組の価値について考える	見いだす活動Ⅲ 地域の課題の解決に向けて自分にできることを意思決定する
資料内容	・現状に関わるもの ・将来に関わるもの	・目に見えなかった工夫や努力 ・かけた時間や取組の多さ	・周りへの影響 ・取組にかける費用 ・困っていること
資料提示	・表や年表、グラフにする ・一部を隠す	・表や年表、グラフにする ・タイムスケジュールにする	・GTによる提示(話)
思考方法	分類する	関連付ける	
思考ツール	ピラミッドチャート	クラゲチャート　ロジックシート	
GTの活用	※必要に応じて活用		・視点の提示 ・子供たちと共に考える ・アドバイスや助言

(ｲ) 思考ツールの活用

導入段階においては、分類する考えを促すために、ピラミッドチャートを用いる。展開段階においては、関連付ける考えを促すために、クラゲチャートを用いる。終末段階においては、自分の生活や地域の様子と関連付けて考えることができるようにするために、ロジックシートを用いる。このように、促したい思考に合わせて、思考ツールを選択できるようにする。

(ｳ) GTの活用

終末段階において、周りに与える影響や一番考えないといけないところなどの視点を提示してもらうようにする。その後、地域の課題の解決に向けて、子供たちができることを一緒に考えてもらう。このように、地域の課題の解決に向けて取り組む人物と関わることで、より具体的に自分にできることを考えることができる。

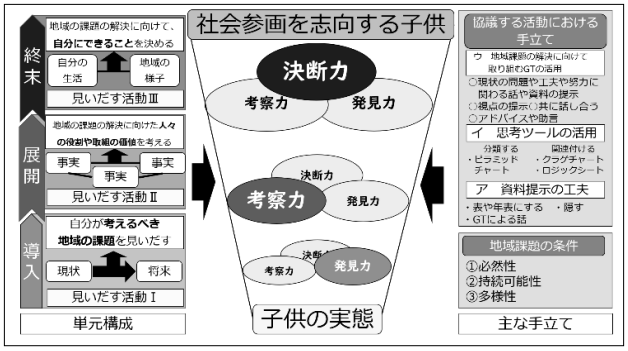


図６　研究構想図

(4) 指導の実際（９月実証）

ア　小単元名 第４学年「何ができる？～福岡県のごみ処理とこれから～」

イ　小単元の目標

○　福岡県におけるごみ排出量の多さ、ごみ処理場の限界の事実から、これからのごみ処理に着目した問いを見いだすことができる。（発見力）

○　地域や年度で比較したり、ごみ処理の取組とごみ排出量の変化を関連付けたりして、ごみ処理に関わる人々の役割や取組の価値を見いだすことができる。（考察力）

○　自分の生活や地域のごみ処理の様子とごみ処理における課題を関連付けて、自分にできることを意思決定することができる。（決断力）

ウ　計画（全 10 時間）

(ｱ) 福岡県内のごみ処理の問題について調べ、学習問題を設定し、学習計画を立てる。――２時間

(ｲ) ごみ処理の取組について調べ、関わる人々の役割や取組の価値について考える。――５時間

(ｳ) これからのごみ処理について、自分にできることを話し合い、決める。――――３時間

エ　小単元の仮説

第４学年小単元「何ができる？～福岡県のごみ処理とこれから～」の学習において次の手立てを行えば、これからのごみ処理について自分にできることを意思決定する子供が育つであろう。

○　福岡県のごみ処理に関わる現状と将来の資料の提示　［着眼イの(ｱ)］

○　関連付けて考える思考ツールの活用　［着眼イの(ｲ)］

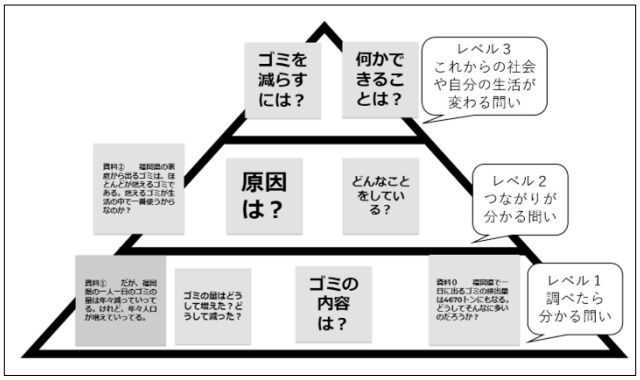
○　ごみ処理の課題解決に向けて、共に考える GT の活用　［着眼イの(ｳ)］

オ　指導の実際

本小単元では、「このままでは残り 17 年程度で最終埋め立て場が使えなくなるので、どうにかしないといけない」といった地域の課題を把握し、パッカー車や焼却場、埋め立て場で働く人々の役割や取組の価値について捉えた上で、自分にできることを決めることをねらいとした。

(ｱ) 見いだす活動Ⅰ（１／10 時間）

見いだす活動Ⅰでは、「福岡県のごみ処理を続けていくために、自分にできることは何だろう。」という考えるべき地域の課題を踏まえた学習問題を設定することをねらいとした。そのために、まず福岡県では１年間で約4670トンものごみが出ているといった現状に関する資料を提示した。その後、このまま進んでいった場合の最終埋め立て場の使用可能年数といった将来に関する資料を提示すると［着眼イの(ｱ)］、子供たちは、「ごみを減らすにはどうしたらよいのかな」「何かできることをしないといけないのでは」といった問いをもった。そこで、資料から生まれた問いをレベルごとに分けることができるようなピラミッドチャートを活用し［着眼イの(ｲ)］、問いを分類した（資料１）。授業の最後には、分類した問いの中で、レベル３の「これからの社会や自分の生活が変わる問い」を中心に学習問題を設定することができた。



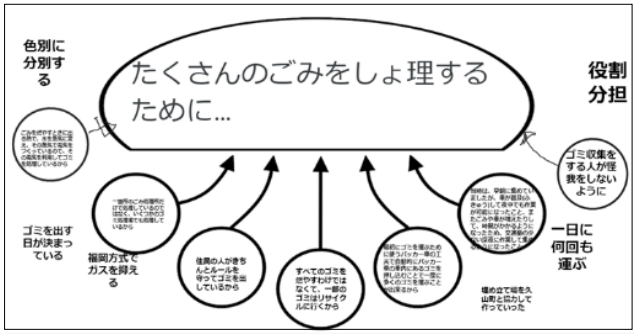
資料１　児童のピラミッドチャートによる分類

考察１

見いだす活動Ⅰで、学習問題につながる、現状に関する事実と将来に関する事実を提示したことは、問いを見いだす上で有効であったといえる［着眼イの(ｱ)］。これは73名の児童のうち、58名（約78％）が５個以上の問いをもつことができたことから分かる。また、その見いだした問いをレベルごとに分けることができるピラミッドチャートを活用したことは、地域の課題を踏まえた学習問題を設定することに有効であったといえる［着眼イの(ｲ)］。これは73名の児童のうち、60名（約82％）が「ごみを減らすにはどうしたら」や「何かできることはないか」といった地域の課題の解決に向けた考えをもっていたことから分かる。

(ｲ) 見いだす活動Ⅱ（７／10 時間）

見いだす活動Ⅱでは、パッカー車や焼却場、埋め立て場の取組を基にして、たくさんのごみを処理するのは、まちをきれいに保ち、自分たちも含め住んでいる人たちが気持ちよく過ごすことができるといった、地域の課題の解決に向けて取り組む人々の役割や取組の価値について考えることをねらいとした。そのために、まず久山町との協力の資料を提示した［**着眼イの(ｱ)**］。すると、児童は、「たくさんのごみを処理するために、他の町とも協力している」ことに気付くことができた。その後、追究してきた事実を基に、資料２のようにクラゲチャートを活用し［**着眼イの(ｲ)**］、「福岡市では、夜間回収をしたり、久山町の人とも協力したりしていて、さらに福岡方式でガスや汚い水が出るのをおさえているので、私たちも気持ちよく過ごすことができている」とたくさんのごみを処理するための取組の価値につながる発言をしていた。



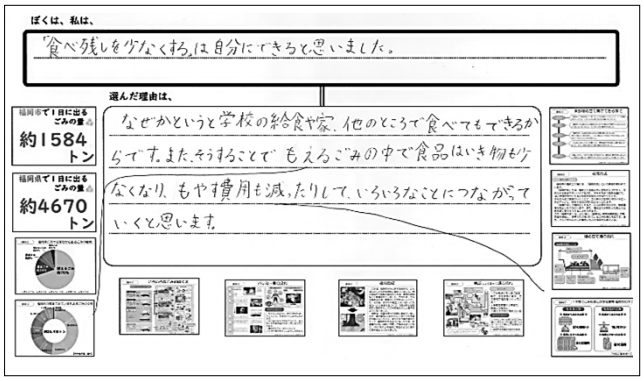
資料２　児童のクラゲチャートによる関連付け

考察２

見いだす活動Ⅱで、取組を関連付けるクラゲチャートを活用したことは、取組の価値を見いだす上で有効であったといえる［**着眼イの(ｲ)**］。これは、73名の児童のうち52名(約72%)が、「きれいなまちを保つため」といった取組の価値と人々の取組を関連付けた記述が見られたことから分かる。

(ｳ) 見いだす活動Ⅲ（９／10 時間）

見いだす活動Ⅲでは、地域の課題に対して、自分にできることを決めることをねらいとした。そのために、まず福岡市環境局の方(GT)にごみ処理にかかる費用を提示してもらった［**着眼イの(ｱ・ｳ)**］。その後、GTにごみ処理にかかる費用の中には、無駄に処理されているものがあることを話してもらった。子供たちは今まで追究してきた資料が含まれたロジックシートを活用し［**着眼イの(ｲ)**］、自分にできることを考えた(資料３)。また、気になったことや疑問に思ったことは、GTに質問することができるようにした(資料４)。すると、資料３のように、「食品廃棄物が多いので、食べ残しを少なくすると、燃やす費用も安くすることができる」と地域の課題に対して、地域の様子を関連付けて、自分にできることを決めることができていた。



資料３　児童のロジックシートによる意思決定

資料４　共に考えるGTの様子

考察３

見いだす活動Ⅲで、GTにより現在市のごみ処理で困っていることの資料を提示してもらったことは、一般的な解決方法ではなく、福岡市にとって効果的な解決方法を考える上で有効だったといえる［**着眼イの(ｱ・ｳ)**］。それは、73名の児童のうち、59名(約80%)が、福岡市の無駄な処理になっているものや自分の生活で出ているごみと関連付けて、ごみを処理する費用を少なくするために自分にできることを決めていたことから分かる。しかし、約20%の児童は、福岡市や自分の生活のことを考えず、一般的な解決方法を選んでいる児童がいた。

カ　全体考察

「見いだす活動ⅠとⅢ」において、学習問題につながる事実と効果的な解決方法につながる事実の２つを段階的に提示したことは、地域の課題を捉えることに有効であった。しかし、一方で「自分が生活する中でできそうなこと」、または「市や県の課題から必要だと考えたこと」のどちらか１つの側面からしか考えられておらず、一般的に言われている解決方法を選ぶ児童がいた。

(5) 指導の実際（12 月実証）

ア　小単元名 第４学年「福岡市観光 NEXT～楽しんでほしいな！ぼく・わたしたちのまち～」

イ　小単元の目標

○　コロナ前の観光客数と2025年に福岡市が目指している観光客数の事実から、福岡市の観光を基にしたまちづくりに関わる課題を見いだすことができる。（発見力）

○　福岡市観光産業課の観光客を受け入れる取組を基に、福岡市の観光を基にしたまちづくりに関わる人々の取組の価値を見いだすことができる。（考察力）

○　福岡市の観光を基にしたまちづくりに関わる課題に対して、実際に目で見た福岡市の観光の様子と福岡市が感じていることを関連付けて、自分にできることを決めることができる。（決断力）

ウ　計画（全 10 時間）

(ｱ)　福岡市の観光の様子について調べ、学習問題を設定し、学習計画を立てる。――――２時間

(ｲ)　福岡市の観光産業課の取組について調べ、取組の価値について考える。――――５時間

(ｳ)　福岡市のまちづくりに関わる課題に対して、自分にできることを決める。――――３時間

エ　小単元の仮説

第４学年小単元「福岡市観光 NEXT～楽しんでほしいな！ぼく・わたしたちのまち～」の学習において次の手立てを行えば、これからの福岡市のまちづくりに対して、自分にできることを意思決定する子供が育つであろう。

○　福岡市の観光に関わる現状と将来の資料の提示　［着眼イの(ｱ)］

○　関連付けて考える思考ツールの活用　［着眼イの(ｲ)］

○　福岡市の観光を基にしたまちづくりに向けて、共に考える GT の活用　［着眼イの(ｳ)］

オ　指導の実際

本小単元では、９月実証の課題を受けて、より適した解決方法を選択することができるように、「見いだす活動Ⅱ」に向けては、実際に博多旧市街地に行き、生活する中でできそうなことを考えることができるようにした。また、「見いだす活動Ⅲ」においては、GTとのやりとりの中で、市が課題に感じていることを捉え直すことができるようにした。

(ｱ) 見いだす活動Ⅰ（１／10 時間）

見いだす活動Ⅰでは、「たくさん(2300万人)の観光客を受け入れるために、できることは何だろう」という考えるべき地域の課題を踏まえた学習問題を設定することをねらいとした。そのために、まず福岡市はコロナ前に約2150万人もの観光客が訪れているといった現状に関する資料を提示した。その後、2025年に目指している観光客数といった将来に関する資料を提示する［着眼イの(ｱ)］と、子供たちは、「このままたくさん受け入れることができるのかな」などの問いをもった。そこで、ピラミッドチャートを活用して［着眼イの(ｲ)］問いを分類し、福岡市の観光を基にしたまちづくりの課題を含んだ学習問題を話し合うことができた。

考察１

見いだす活動Ⅰで、福岡市の観光に関わる現状と将来の資料を提示したことで、「たくさんの観光客を受け入れていくために、自分にできることはないか」と地域の課題を踏まえた学習問題を設定することができた。これは、73名中、59名(約80％)の児童が「自分にできることは」「観光客を増やしたり、受け入れたりしていくためには」という問いをもっていたことから分かる。

(ｲ) 見いだす活動Ⅱ（７／10 時間）

見いだす活動Ⅱでは、福岡市観光産業課の方々が博多旧市街の職人さんたちと協力して、博多旧市街の歴史や伝統を発信しようとしていることや観光客に楽しんでもらうように取り組んでいることを、実際に博多旧市街に校外学習へ行くことを通して捉えることをねらいとした。そのために、福岡市産業観光課の取組において、博多旧市街プロジェクトに約4000万円の費用をかけて推進されている資料を提示［着眼イの(ｱ)］した。また、

資料５　校外学習の様子

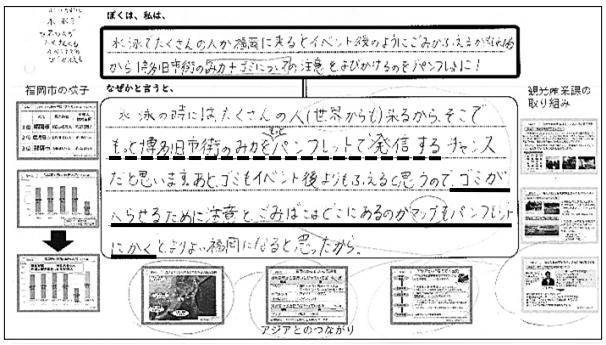
校外学習の中で、「博多旧市街には、歴史的な神社や博多織など伝統的なものもたくさんある素敵なまちであること」を感じることができた(資料５)一方で、「意外と観光客が少ないこと」を捉えることができた。その後、クラゲチャートを活用［**着眼イの(ｲ)**］し、追究してきたことを関連付け、福岡市観光産業課の方々は、約4000万円の費用をかけて、博多織などの職人さんたちと協力していることを捉えた上で、「博多旧市街の取組を進めることで、たくさんの観光客に楽しんでもらい、受け入れることができるようにしている」と取組の価値を考えることができた。

考察２

見いだす活動Ⅱで、博多旧市街に行き、実際に見たり、聞いたりすることで、より具体的に博多旧市街の取組や人々の協力を捉えることにつながった。これは、73名中55名(約75%)がクラゲチャートで取組を関連付け、価値を自分なりにまとめていたことから分かる。

(ｳ) 見いだす活動Ⅲ(９／10 時間)

見いだす活動Ⅲでは、地域の課題に対して、自分にできることを決めることをねらいとした。そのために、まず福岡市観光産業課の方(GT)に、福岡市でたくさんの人が集まる施設についての資料を提示［**着眼イの(ｱ)**］してもらう中で、たくさん人が集まることで困っていることを話してもらった。すると、「人が集まることで、ごみの問題などが起こることは、全然考えていなかったのでそこも考えていきたい」と福岡市の観光を基にしたまちづくりの課題を捉え直すことができた。その後、ロジックシートを活用［**着眼イの(ｲ)**］し、自分にできることを記述していった。そこで、「他に困っていることはありますか」などと疑問に思ったことや知りたいことをGTに尋ねながら［**着眼イの(ｳ)**］、校外学習で学んだこと(点線)とGTとのやりとりで気付いたこと(直線)を基に、考えを決める姿が見られた(資料６)。



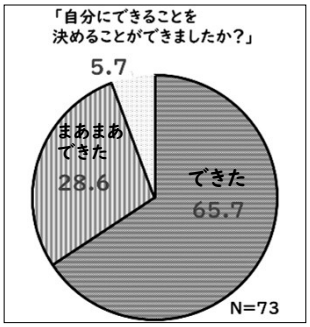
資料６　校外学習と GT とのやりとりから考えた自分にできること

考察３

見いだす活動Ⅲで、GT から困っていることを提示してもらったり、自分の考えをつくる際に相談を受けてもらったりしたことで、「自分が生活する中でできそうなこと」と「市や県の課題から必要だと考えたこと」の両方の面から考えをつくることができた。

カ　全体考察

小単元後、「自分にできることを決めることができましたか」と尋ねたアンケートでは、約94%の児童が「できた」「まあまあできた」と実感していた。また、その理由を見てみると、「今、どのようなことが問題になっているかを知っておくことが大切」「専門的な人に聞くと分かりやすい」といった発見力や考察力に関わる記述が見られた。これは、各段階に「見いだす活動」を位置付け、資料・思考ツール・GT を組み合わせた単元構成を行ったことが、「社会参画を志向する姿」に有効であったと考える。



資料７　小単元後のアンケート結果

５　研究の成果と課題

(1) 成果

○各活動で発揮させたい資質・能力に適した思考ツールの開発を行ったことで、地域の課題を含んだ学習問題を考えたり、取組を関連付けて人々の役割や価値を考えたりすることができた。

(2) 課題

●終末段階以外での GT の活用の条件について整理していく必要がある。

６　研修を修了しての感想

この１年間、社会科の本質や社会科で発揮する資質・能力について改めて学ぶことができ、子供たちの思考の流れを大切にすることの重要性を感じました。今後もさらに研鑽を積んでいく所存です。

備　考　○　在籍校と電話番号　　福津市立福間小学校　　ＴＥＬ　(０９４０)４２－７５６６